

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は東日本大震災の被災地区にある。仮設住宅やみなし仮設住宅で生活する町民は減り、住宅や店舗の再建が進められてきた。震災の記憶風化を防ぎながら、地域の更なる発展に本校生徒も貢献することが求められている。

本校は、震災以降特に、生徒数が減少し、令和2年度からは1学年1学級の定員となる。また、山田中学校からの入学者が例年85%以上で、高校入学後新たな人間関係を構築しづらく、友人相互の有意義な刺激も少ない状況にある。

このような状況を踏まえ、復興への貢献、学び拡大、コミュニケーション力の伸張等を目標とし本事業を活用した。

II 取組の概要

1 雫石高校との交流

(1) 交流の経緯

山田町と雫石町では、本校生徒が雫石町開催の講演会に参加し、雫石町を訪問したドイツ人高校生が、山田町を訪問し震災について学習したり、本校で空手道を体験したりする等の交流が行われて来た。

その交流を発展させ、昨年度より本校の「海の運動会」に雫石高校生が参加し、雫石高校の「雪上運動会」（昨年度、雪不足で中止）に本校生徒が参加して、交流し体験を広げることとした。

(2) 海の運動会

「海の運動会」は、震災後の中断を挟み、19回を数える行事で、浦の浜海岸で、カヌー競漕、ビーチフラッグ競走、砂浜アート作成などを行う運動会である。また、運動会前後に、海岸清掃を行っている。今年度は8月27日に開催した。

雫石高校生徒1年生(27名)は、26日に来町し、鯨と海の科学館を訪問するなど、復興防災学習を行った。

運動会では、雫石高校生は砂浜での活動やカヌーなど、初めての活動を楽しんだ。また、カヌー競漕では、救命胴衣の付け方も体験した。更に希望者は、本校所有の救命艇で山田湾を回り、カキやホタテ養殖の様子も見学した。

本校生徒も、救命胴衣着用やカヌーの操作方法を説明するなど交流を行った。



生徒の感想

小林海梨さん（雫石高校）

元々海が少し怖くて、競技に出られるか心配でした。でも、山田高校の方が楽しそうに競技に参加しているのを見て、私も楽しい気分になりました。上手にできるか不安もあったけど、色んな人が応援してくれたり、励ましてくれたりして、いい思い出になったし、バレーの試合が終わった時に、握手してくれて、山田高校の人達は明るくて、優しい人達だと思いました。

新里愛美さん（雫石高校）

あまり海に行ったことがなくて、初めて経験することが多くてとても楽しかったです。裸足で砂浜を歩く感触がとても気持ちがよくてやみつきになりそうです。初めてカヌーに乗ったのですが、進むことができても、思うような方向に動くことがとても難しく、そこがとても楽しかったです。お昼ご飯で食べたジンギスカンもみんなで食べられてとても美味しかったです。

大久保一樹さん（山田高校）

全校生徒と雫石高校が楽しめていて良かったです。雫石高校のみなさんは、慣れない砂浜での競技だったと思いますが、一生懸命走り、楽しそうに参加してくれました。山高はどの学年も、競技も片付け、清掃も協力して行っていました。他の地域では体験できない海の運動会を3年間できたことがうれしかったです。

東良美さん（山田高校）

1年生にとって初めての海の運動会は、緊張、不安、期待といろいろな気持ちを胸に秘め始めました。カヌーや出た目でGo!など、初めての競技があり、ときどきしましたが、いざやってみるととても楽しく、競技をしている人のとても良い笑顔が見られました。応援する声も浦の浜に響き活気ある海の運動会になりました。雫石高校の皆さんと交流している姿が見られとてもいい学校交流ができたと思います。想像以上に楽しい海の運動会となり、来年がもう楽しみです。

(3) 雪上運動会

雫石高校の伝統行事「雪上運動会」に、本校生徒12名が参加した。

雪上での、タイヤリレー、綱引き、ドッジボール等を行い、雪上で動くことの大変さと面白さを体験した。

不慣れな動きで苦労したが、雫石高校生の応援もあり、楽しむことができた。



生徒の感想

橋田隆輝さん（山田高校）

雫石高校の皆さんと、交流をしつつ、運動会を楽しむことができました。タイヤリレーでは、最初はとてもよかったのですが、その後抜かれてしまし、決勝まで行けなかったものの、雫石高校の皆さんが応援をしてくれて、楽しむことができました。

佐々木麻里さん（山田高校）

雪上運動会で学んだことが2つあります。

1つ目は、「交流することの大切さ」です。私たちが競技をしているときに、雫石高校の皆さんが応援してくれました。休憩中にも、雫石

高校の皆さんが積極的に話しかけてくれて、とても温かい気持ちになりました。2つ目は、雪の多い地域ならではの、「冬季の楽しみ方」です。地域によって様々な楽しみ方があるのだなと思いました。極寒の中で食べた豚汁が、とてもおいしかったです。

2 平館高校との交流

(1) 交流の経緯

昨年までは、平館高校家庭クラブの生徒が来町し、山田町の商店街の「いちび」で、八幡平市の特産品販売、子どもやお年寄りとの交流を実施。

今年度は、交流の形態を変え、お互いの学習成果の発表を中心に交流した。

平館高校からは、16名の生徒が来校した。

(2) 調理活動とおした交流

山田町は、江戸時代にオランダ船が嵐をさけるために寄港した歴史があり、また東京オリンピックのホストタウンとして、オランダ料理の普及に努めている。

そこで、山田町の食材を使用したオランダ料理を調理し、昼食会を開き交流した。

本校からは、家庭クラブ員、生徒会、フードデザイン選択者から15名が参加した。

- ① 山田高校生徒会が、オランダ船入港の経緯等を説明。
- ② 2校の生徒から構成された班ごとに、講師の指導を受けながら、山田の食材を使ったビスパネチェやオランダ風コロッケ等を調理。



- ③ 班ごとに昼食。東日本大震災時の話題等で情報交換を行った。



(3) 学習成果の発表をとおしての交流

①「平館高校家庭クラブ発表」

平館高校家庭クラブが、継続して取り組んでいる紫薫枕の制作をとおして、地域の人々に貢献している様子を学んだ。



②「山田高校震災復興状況報告」

生徒会が、震災当時の様子、その後の山田町の復興の状況等を報告した。震災前と後の町の様子、人口減少などの問題、町の産業等の説明、紹介を行った。



③「復興防災学習～碑の記憶～発表」

本校1年生が、総合的な探究の時間で8班構成で学習した「碑の記憶」を1班が発表した。新聞やインタビューなどをとおして探究した、石碑から読み取れる防災への思いや教訓を伝えた。



しの苦勞を知るとともに、雪の楽しさを体験できた。

参加生徒が増えたことにより、行事も盛り上がり、コミュニケーションを取りながら、他校の生徒への配慮を深めることができた。

両校の所在地が離れているため、時間的に制約があるが、来年度は、本校生徒による復興防災に関する発表を検討し、交流を深めたい。

天候に左右される行事のため、雨天や荒天時の内容及び、雪不足時の内容の検討が必要である。

雫石高校は、雫石町のバスで移動できるが、本校では本事業がなくなれば、費用の負担が問題となる。

2 平館高校との交流

調理活動をとおして、山田の食材等について、平館高校生だけでなく、本校生徒も学ぶことができた。また、一緒に調理活動を行ったことで、昼食時には、大分打ち解けて話ができるようになった。

山田町が普及に力を入れるオランダ料理に関しても、本校生徒も初めて調理し、食べる機会となり、よい学習機会となった。

お互いの学習成果の発表では、山田高校生は平館高校家庭クラブの継続した研究活動で、地域に貢献している姿に感銘を受けた。

枕をお年寄りに使い易くするため、役場職員や介護施設の方々と協力している点や、問題意識を持って、自ら考えて改良を重ねている点が、大いに刺激になった。

また、全国大会で何度も発表していることから、高いプレゼンテーション技術にも触れることができ、この直後に行われた本校の生徒たちにも、大いに参考になった。

山田高校の2つの発表では、平館高校生は復興状況を理解し、防災への意識を高めることができた。特に、1年生の「碑の記憶」の発表では、探究学習の面白さが伝わったと思われる。

課題としては、お互いの所在地が離れており、時間的な制約が多いこと、調理活動では、調理室の収容能力のため、参加人数の制限があることが、挙げられる。

平館高校には家政科学科があるので、そういった生徒からの調理や衛生面での指導や支援を行ってもらうこと等、検討したい。

本事業で平館高校生のバス費用を援助してもらい、この交流が実現できた。本事業がなくなった場合、どのように交流を継続するかも課題である。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 雫石高校との交流

お互いの地域では体験できない活動を行うことができた。雫石高校生は、復興防災学習で津波被害の恐ろしさを学ぶとともに、海の楽しさや豊かさを学んでもらえたと思う。山田高校生は、雪の多い暮ら